竹野内恵太著
『エジプト初期国家社会の支配戦略と統治原理』
六一書房　2021 年 2 月　315 頁

中野 智章*

Book Review: Organizing Strategies and Ruling Principle in Early Egyptian State.
Keita TAKENOUCHI, Rokuichi Shobo 2021

Tomoaki NAKANO

冒頭から私事で恐縮だが、エジプトの国家形成期に評者が関心を抱いた三十数年前、国内で入手が可能だった書籍はごくわずかで、古代史の定番書として知られるケンブリッジ古代史の初期王朝時代の章や、大学の図書館などが所有するさまざまな遺跡の調査報告書を除けば、首都メンフィス（Memphis）に隣接したとされるサッカラ（Saqqara）第 1 王朝墓地の調査を 20 世紀半ばに行なった W. B. エメリー（Emery）が、ペンギン・ブックス（Penguin Books）から出版した Archaic Egypt と題するペーパーバックがその代表的なものであった（Emery 1961）。そこに示された当時の歴史像は、サッカラ墓地の調査結果に、20 世紀初めに F. ピートリー（Petrie）が実施した、初期王朝時代の王たちの出身地ティス（Tis）近郊に位置するとされるアビドス（Abydos）墓地の発掘調査で得られた資料、後代に記されたパレルモ・ストーンやトリノ王名表などを組み合わせた断片的なものに過ぎず、続く古王国時代の遺構や遺物からの類推に頼るところが多かった。他には W. ヘルク（Helck）や J. ヴァンディエ（Vandier）、A. ガーディナー（Gardiner）などによる歴史学や考古学的見地からの考察に加え、P. カプロニー（Kaplony）による文字資料、A. アル・コウリ（El-Khouli）による石製容器の集成といった基礎的資料が整いつつはあったものの、全体的には統一国家の形成に至る過程がかなり不透明だったこともあり、ジグソーパズルにたとえていえば、ピースが大幅に欠けた状態が続いていた。

その後、デルタ地帯の調査が飛躍的に進み、ブト（Buto）遺跡などの調査成果を紹介する Nile Delta in Transition 等のシンポジウムなどが催されるとともに、2000 年代に入るとエジプト初期国家形成期を扱う Origins と題した国際会議が定期的に開催され、それまで世界各地でバラバラになされていた調査研究の進捗を一様に目の当たりにする機会が生まれると、研究者の数も飛躍的に増え、当該期の研究はにわかに活気を帯びるようになった。現在では、エジプト考古学研究が最も盛んな時代の 1 つになったといっても過言ではない。Origins で発表された研究成果は大部の報告集として出版されるほか、1999 年に出版された T. ウィルキンソン（Wilkinson）の Early Dynastic Egypt をはじめ（Wilkinson 1999）、概説書のみならず特定のテーマを扱った研究書も着実に増えつつある。

本書はそのような研究状況の中、氏が日本考古学の分析手法や比較考古学的視点も用いてエジプト初期国家社会における支配のありかたについて論じた著作であり、これまで細かな研究が欠けていた石製容器を中心に、多くの論点を取り扱っている。そのすべてをここで逐一俎上に載せることは難しいが、特に重要と思われる点をいくつか取り上げ、責を果たしたい。

さて本書は、「はじめに」「序章　本書の目的と方法」「第 1 章　本書で検討するエジプト初期国家社会」、「第 2 章　中央の葬制の拡散と地域社会の組織化プロセス」「第 3 章　行政組織・物流ネットワークの発達と地域間関係」「第 4 章　威信財儀器の生産供給体制―石製容器の大量生産と大量副葬現象―」「第 5 章　儀式イベントと儀礼的景観」「終章　エジプト初期国家社会の支配戦略と統治原理」「あとがき」「引用文献」「引用図表」という構成を採り、筆者が早稲田大学大学院文学研究科に提出した博士学位論文をベースとしている。

書名に「支配戦略と統治原理」とあるように、また各章のタイトルを見てもわかるように、「葬制」や「行政」「物流」「威信財」「生産」「副葬」「儀式」といった文言だけを見れば、日本の国家形成期を論じた考古学書と見間違えそうな章立てである。実際、「あとがき」に記されているように、古墳時代の社会を研究する指導教員の下で学部を過ごした氏が、こうしたキーワードに現れる視点を重視しながらエジプト初期国家の状況に迫ろうとしたことがうかがえる。そしてエジプト初期王朝社会研究の課題点として、要因論ではなく組織論に基づき、「単一の権力組織がある一定の領域あるいは圏域内を組織化・集団化する過程とそのメカニズム」を明らかにすることを目指している

*中部大学国際関係学部
College of International Studies, Chubu University

西アジア考古学　第 24 号　2023 年　77-80 頁 © 日本西アジア考古学会

(p. 97)。そこには「構造的アプローチによる要素間の並列関係や社会的な発展類型はあくまで相対化の手段であり、組織化という特定の動態とその特質を示すものではない」の強い想いがある（p. 60)。

そのため、考古学における国家形成論やエジプトの初期国家形成・成立期の社会の概要を整理した上で、副葬土器の地域類型や分布様態の変化から中央の葬制が拡散、地域社会が組織化されたプロセスを確認し、ついで文字資料から知られる行政システムや物流ネットワークが情報コミュニケーションの発達、ひいてはそれを媒介とした地域伝統の解体や領域形成へつながったと論を展開する。この前半部は、冒頭でも述べたさまざまな情報が蓄積しつつある資料や研究の現状を整理活用し、全体像を把握しようとする試みであり、後述するような疑問はところどころ見受けられるものの、論旨は明快である。

そして全体の 3 分の 1 にあたる 100 ページを占める第 4 章の石製容器に関する論考から、本書の後半とも言うべき支配戦略の新たな見かたが示される。ちなみに、エジプト初期王朝時代の石製容器が優品で技術的にも優れていたとは先に挙げた概説書などにも良く見られた言説だが、集成や一部遺跡の出土品を取り扱った研究はあるものの、全体を細かく網羅した分析はこれまでほとんどなされていない。評者も、初期王朝時代の未解決問題として知られた第 1 王朝の王墓所在地問題を考察するため、同時代の遺物研究を試みた 90 年代の初めには、分析候補から外した遺物の 1 つである。なぜなら、アビドスやサッカラといった墓地から得られた石製容器の大半は現在アクセスが不可能な状態にあり、アビドスについてはその多くが未報告であること、そのため報告書から得られるわずかな情報も大まかな形態や法量にほぼ限定され、出土状況に至っては不明なものがほとんどを占める。加えて、続く古王国時代第 3 王朝の王ネチェリケト（Netjerikhet）の階段ピラミッドの地下にある通称「ギャラリー」には、少なくとも数万点に上るとされる初期王朝時代の石製容器が今なお眠っているとされ、自身も今から 15 年ほど前に参加した調査で未だ大量の石製容器片が散乱する状況を実際に確認している。

そうした諸々の制限がありながらも、氏はアビドスやサッカラといった重要墓地の遺物を中心に器形組成と石材構成、器種別のサイズ分析、器種間のサイズ比較等を行い、その上で流通や生産フロー、製作技法、副葬における供物儀礼の実践などに議論を展開させ、最終的に石製容器が国家的イベントである祝祭や葬祭時に返礼・贈与の形で各地のエリートに配付されたと指摘する。一種類の遺物からどれだけの情報を引き出すことが可能なのかという点において、丹念な分析が積み重ねられた上での見解であり、その試みは高く評価されてしかるべきだろう。その後、議論はそうした配付の機会や場でもあったと氏が考える儀式イベントや儀礼的景観の考察へと展開し、最終的に『ヒエラコンポリス（Hierakonpolis）やアビドスなどでもともと狭域な共同体あるいは地域国家の内部で働いていた支配的イデオロギーは「文化システムによる規範の独占」へと発達し、行政ネットワークの整備や威信財的儀器の配付などによって広域化した。これが初期王朝社会の国家的システムと文化的規定力のメカニズムであり、古王国時代以降も続く基本的な支配の力学であった。』と結論づける（p. 289)。

このように、氏は先王朝時代末期から初期王朝時代に掛けての調査や研究の情報を整理し、またこれまで深く分析されることがなかった器物を扱った上で、そこに文字資料から判明している行政機構の様相を照らし合わせ、初期国家社会の支配戦略と統治原理について 1 つの新しい見かたを提示している。そこで以下では、その見かたにも影響を与えるであろう 3 つの点について、いくつか見解を記しておきたい。

第一は、「集団の組織化・領域化」を見出すという目的で、石製容器や土器自体を細かく分析する一方、関連する人物像については「集団」として巨視的に見ているため、対象とする墓地の細部や被葬者像までは論が必ずしも及んでいないように見受けられる点である。例えば、評者は氏の言う「北サッカラ墓地」が実際には第 1 王朝初頭のアハ（Aha）王期に造られた 3357 号墓を基点として南北 2 つの墓域に分かれ、南墓域には王子や王女といった王族、北墓域には高官層が埋葬された可能性が高いと考えている（中野 2017)。そうした墓域の存在を当てはめてみれば、本書の表にある「北サッカラ墓地」における南墓域の石製容器出土点数は、北墓域のそれに比べ圧倒的な数量を示すことになるが（p. 159、表 5)、そのような指摘は見られない。

その点に関しては、王墓地であるアビドスにおいてピートリーが破片資料を含め総計 5 万～10 万点に上る石製容器が出土したと述べてはいるものの（p. 157)、サッカラでも王族の墓に集中するのであれば、石製容器の分布やその背景にあった組織についても見方が変わる可能性があろう。氏は「おそらく配布時に王墓や高官墓へ副葬するものと、地方社会や御料地へ配付するものに分けられていたのではないか」と述べるものの（p. 238)、一方で、器形と石材の対応関係については「アビドスとサッカラでは共有されない組み合わせが存在し、生産組織は少なくともメンフィスとティスにおいて二極に分化していた」とするだけに(p. 161)、詳細が気に掛かるところである。

第二に、石製容器は祝祭や葬祭を契機として生産さ

れ、配付されたと氏が結論づける上で重要なポイントとなる、「周壁」と呼ばれる矩形の泥煉瓦製構造物の意味をどう捉えるかという問題がある。「周壁」には「パレスファサード（palace facade、王宮ファサード）」と呼ばれる壁龕状の連続凹壁を外面にめぐらせる例が多いものの、その構造や装飾は様々で、必ずしも一様ではない。しかし氏は、メソポタミア起源の「パレスファサード」が、エジプトでは原王朝時代ナカダ（Naqada）IIIA2/B1 期にデルタ地帯のテル・エル＝ファルカ（Tell el-Farkha）遺跡で小型マスタバ墓に用いられるなど下エジプトに導入され、やがて北サッカラの初期王朝時代のマスタバ墓に設けられたという一般的な見解を用いるに留まっている（pp. 93–94）。

だが実際には、その北サッカラ最初期の 3357 号墓やナカダの大型マスタバ墓におけるパレスファサードはより入り組んだ複雑な構造を呈しており、テル・エル＝ファルカの小型マスタバ墓とは壁体の厚みや日乾煉瓦の積み方も異なる。これを時期的な変遷と見ることは無論可能だが、一方で、北サッカラ墓地では第 1 王朝半ばに入ると同時期に 2 種類の壁龕パターンが見られるようになり、それは上述した南北の墓域や被葬者の階層とも関係している（中野 2004）。

パレスファサードは王名を記した枠「セレク（Serekh）」の誕生過程にも大きな影響を与え、王権と密接に関連するほか（中野 2001）、氏が供物儀礼とつながる石製容器、土器の副葬を基にしていると述べる「儀礼リスト」を設置した偽扉の原型ともされ、宗教的な色合いが強い。アビドスやサッカラ、ヒエラコンポリスにおける連続凹壁の構造は同時代であっても同じとは限らないだけに、ソカル祭やセド祭などの葬祭用であれ祝祭用であれ、「周壁」の意味や役割を考察する際には今後の検討が必要となろう。それは氏が主張する、「ヒエラコンポリス・アビドス型」と「サッカラ・タルカン（Tarkhan）型」という 2 つの墓地の「型」に応じたスペクタクルの構成を考察する上でも重要である。なお本書ではふれられていないようだが、近年ではナルメル（Narmer）王の周壁と目される遺構もアビドスで出土しており（Bestock 2012: 38–45）、その存在如何によっても結論部に幾つかの修正が求められよう。なお L. ベストック（Bestock）は王宮ファサードの定義自体に疑問を呈し、「王宮」ではなく「周壁」の可能性を挙げている。

第三は、政治や宗教といった歴史的側面や解釈に関わる部分である。例えば統一国家初期の様相に関しては、ナルメル王による下エジプトの征服を歴史的史実とみて論を展開している。そこでは、ナルメルのパレットが「歴史記録」であり、ナルメルによる戦争の勝利という「熱狂」を引きずったまま、ホル・アハ（Hor-Aha）から北方地域の組織化に着手したと述べるが（p. 274）、ナルメル・パレットが史実を示しているか否かに関しては、ドイツ隊が発見した同様の構図を描いたラベルの解釈も含め、研究者間で大きく意見が分かれる。

また第 5 章の「儀式イベントと儀礼的景観」では、サッカラにおける「行列の想定ルート」をギスル・エル＝ムディール（Gisr el-Mudir）といった周壁や第 2 王朝期の王墓の位置とあわせて提示しているが、その論拠の一つともなる太陽の日の入りの光景について、J. カール（Kahl）の言う「王であるホルスよりも高い位置にいる太陽神ラーが第 2 王朝に形成され、神学的枠組みが変化した」とする点についても（p. 262）、意見を異にする研究者が多い。これら 2 点に関し、評者は必ずしも氏の考えを全面的に否定するものではなく、むしろ検討に値する魅力的な仮説と捉えるものだが、できれば否定的な意見を基に考えた場合の解釈の可能性についても同時にふれられていると、より読者にとっては考察の幅が広がったように感じる。

なお、そうした歴史的背景を踏まえた論の展開という意味では、第 2 王朝末のカセケムイ（Khasekhemwy）王が上にも述べたアビドスとサッカラ、そしてヒエラコンポリスに建造したとされる「周壁」についても、第 2 王朝の政治状況や、同王のセレクには王の守護神として知られてきたホルス神に加え、その前の王であるペルイブセン（Peribsen）王の守護神でもあったセト神が描かれるなど、政治的に不安定だった時期に各地で行った儀式イベントがどのようなものだったのかを考慮に入れれば、より遺構の解釈も深まったのではないだろうか。また、第 1 王朝デン王期の小型墓が集中する箇所が、氏の言う「行列」の基点からギスル・エル＝ムディールへと移動する途中に存在する点にも注目する必要があろう。かつて W. カイザー（Kaiser）はデン（Den）王が埋葬される以前にここに安置された可能性について言及したが（Kaiser 1985）、この小型墓の存在もカセケムイ王期における葬祭空間の整備につながっていたのかもしれない。

さらには本書の重要な主張として、第 1 王朝におけるジェト（Djet）王期からデン王期（ナカダ IIIC2 期）を地域的組織化および「国家的」統治システムの構築過程から考える画期と位置づけているが、その場合も物質文化だけでなく、治世年数や事績などを含めればより説得力が増したように思われる。また、国内の状況を把握することに集中するため、意識的に対外関係は議論から外したとしているが、その点も組織や領域を考察する上でさらなる解釈を与える要素となろう。

以上、特に注目した点について述べたが、いささか無い物ねだりの観がなきにしもあらず、また、ここでは書ききれなかった事柄（書き始めると書評ではなく論文になってしまうため、敢えて記さなかった事柄）も正直なところ非常に多い。それはとりもなおさず、それだけ本書の内容が多岐にわたり、多くの論点があることを示している。

最後に、何より同じく当該時代を学ぶ者として、とりわけ本書で扱われた石製容器と同じく、アビドス土器やセレク、パレスファサードや連続菱形文といった威信財的な遺物や建築要素などを考察してきた身としては、本書で議論の幅を大きく広げてくれた氏に心からの称賛を送りたい。

参考文献

Bestock, L. 2012 Brown University Abydos Project: Preliminary Report on the First Two Seasons. *Journal of the American Research Center in Egypt* 48: 35–79.

Emery, W. B. 1961 *Archaic Egypt*. Harmondsworth, Penguin.

Kaiser, W. 1985 Ein Kultbezirk des Königs Den in Sakkara. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 61–87.

Wilkinson, T. 1999 *Early Dynastic Egypt*. London and New York, Routledge.

中野智章　2001「セレクの誕生」『西南アジア研究』54号 1–22頁。

中野智章　2004「サッカーラ3505号墓と雄牛頭部模型―第1王朝期墓地研究への手がかりを求めて」『西アジア考古学』5号　107–118頁。

中野智章　2017「王墓にみるエジプト初期国家の王権」肥後時尚・吹田　浩（編）『エジプト学研究セミナー』1–22頁 関西大学国際文化財・文化研究センター。